恋よりも、生命よりも

ぽてと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋よりも、生命よりも

【Ｎコード】
Ｎ５１７０Ｏ

【作者名】
ぽてと

【あらすじ】
ドラマ『愛と青春の宝塚』の二次的なお話です。
オムニバス形式でいくつか書けたらなぁ、と思ってます。
なお、関西の住人じゃないので、関西弁には自信はありません。

秋の良き日（前書き）

初投稿作品です。
どうしても書いてみたかったんで書いてみますが、文章能力にも関西弁にも自信がありません（泣）

秋の良き日

戦争は終わった。

リュータンさんは影山先生と結婚披露宴を挙げた。

戦争直後にもかかわらず、
「呼べる人はみんな呼んで、このリュータンの一生に一度の晴れ姿、大勢の人の目に刻みつけてやるんや！」
というリュータンさんの鶴の一声で、それはそれは絢爛豪華な式になった。
・・・すきやき屋だったが。
燕尾服を着たリュータンさんと、紋付き袴の影山先生が、幸せそうに招待客にお肉をふるまう姿が印象的だった。

「せんせ、お幸せそうですね！」
紅が肉を口いっぱいに頬張りながら声をかけると、影山先生は
「おお、好きな女と結婚できるんや。戦争で死に別れた人たちも多い中、こんな幸せな事はない。幸せなのに辛気臭い顔してたら、それこそ失礼な話や。…タッチー食ってるか？」
と嬉しそうに答えながら、私の方に顔を向けた。
私は食べ途中のお肉を慌てて飲み込んで、
「…食べてます。というよりおかげ様でこんなにお腹いっぱいお肉を食べたの久しぶりで、ちょっとお腹がびっくりしないか心配なくらいです」
と答える。
「そうか。お前はこれから雪組トップになるんやし、栄養つけてはよう最高の状態でお客様の前に出ていかなあかん。もっと食べ。こんな時でもなけりゃ、まだまだご馳走は用意できへん時代やしな」

「・・・タッチートップなんですか！？」
「え、えっ！？すごいタッチー、トップなの！？やったね、おめでと！！」
その時まで無言で食べつづけていたエリが喉を詰まらせながらも驚きを表し、紅もかまぼこのような目をさらに大きく見開いて大きな声で叫んだ。

「かまぼこ、声が大きい！！宝塚関係者以外の方も大勢来てはるのに、まだ公式発表もしてへん事をそないに大声でゆうたらあかんやろ！！」

「あ、リュータンさんごめんなさい！！まだ発表してなかったんですね！？私てっきりもう発表したから教えてくれたのかなぁとか思っちゃって・・・」
「アホ。あんたもう何年タカラジェンヌやってんの。しかもあんたはタッチーの同期やないの。
これからトップになる生徒の不安を少しでも取り除いてやるために、同期の上級生くらいには事前に話をしておいてやろうという、うちの頼もしい旦那様の優しい気持が、あんたには伝わらへんの！」
「うううう…すいませーん…」
紅を怒りながらもそれとなく惚気ているリュータンさんを眺めつつ、エリが呟いた。
「もう十分大声で響き渡ってるんですけど…」
「エリ！なんか言うた！？」
「はい！『リュータンさんの声は、いつ聞いても良く響いているなぁ』って言いました！」
「そうやろ！退団したとはいえ、うちは天下のリュータンや！うちの声は、舞台、や、世界に響き渡って当然や！」
「リュータンさんかっこいい・・・」
いつものように、リュータンさんが自分を賛美し、それを紅がうっ

とりと眺めている。
なんだか懐かしくて、嬉しくて笑ってしまう。

「元気そうやな」
私と同じく、ちょっと遠巻きにしてリュータンさん達を眺めていた影山先生が、ぽそっと言った。
「元気ですよ」
視線はずらすことなく、私も答える。
「元気に、なりました」
「…トモが死んで、エリが退団して、中尉が死んで、リュータンが退団して。お前にとっては、辛い事ばかりだったろうから、これでも少しは心配してたんやで。
…まぁ、俺が心配できる立場やないのはわかってるし、俺はもう好いとる女もいるし？…それでも一応、親戚の兄ちゃんとか、そん位の気持ちでお前の事は心配や。宝塚に入れたのは俺やしな。
…元気なら、良かった。俺に言えるんはそれだけや」
影山先生は、そんな事をごにょごにょ呟いている。

この人も相変わらずだ。
舞台の事ではものすごく厳しいし、自分の素行は悪いクセにタカラジェンヌには「タカラジェンヌとは何たるか」を力説する。一見「自分に優しく他人に厳しい」人に思える。
でも、実際は。
タカラジェンヌを、厳しい世間の目から守るためにどれだけ尽力してくださっているか。
優しい事は言わないけれど、身の内に入れた者を守ろうと、陰で必死に努力してくださっている。
不器用な人なのだ。
「・・・ありがとうございます」
いつも、守ってくださって。

心をこめて言うと、彼はすこし気恥しそうに「おう」と笑った。
私も、笑えた。

ところで。
「先生？なんでリュータンさん燕尾服なんです？すきやき屋さんで披露宴、てのも珍しいなぁと思ったんですけど」
「…言うな。まさか本気やとは思わなかったんや。本気にするとは…」
「？？」
「いいんや、幸せなんやから！！ほっとけ！！」

そんな、秋の良き日。

青春の終わり（前書き）

秋の良き日の、紅バージョンです。

青春の終わり

戦争が終わった。

今日はリュータンさんの結婚披露宴の日！
リュータンさんは、私達に初めてすき焼きをご馳走してくれたあのお店を貸し切って、
たくさんのお肉や食べ物を用意して、
燕尾服を着て私達を迎えてくれた。

「今日は私の、一生に一度の晴れ姿や！きちんとその眼に焼きつけておくんやでぇ！！」
そう言ってはつらつと笑うリュータンさんは、いつ見てもカッコいい。
「はい！！リュータンさん！リュータンさんは、永遠です！！」
昔から私がこんな事言うと、エリやトモは「また紅がおべっか使って」と笑ったけど。
私はいつだって、今だって本気でそう思って言ってるんだから。

私は、田舎の貧乏な農家の生まれで。
お父ちゃんが汗水たらして芋を作っているのを見ながら育った。
いつか自分も農家にお嫁に行って、お父ちゃんみたいな人と一緒になって、畑耕しながら子供を産んで…
そういう「普通の生活」をするもんだとばっかり思ってたけど。

「私もお父ちゃんみたいな人と結婚したい」
そう言うたんび、父ちゃんは首を横に振った。
「まつは、可愛い。世界一可愛い。こんな俺の娘に生まれてきたのが不思議なくれぇだ。お前はもっと、いいとこさ嫁いって、いい暮

らしをするに違いねぇ」
そう言ってなけなしのお金の中から、私を日舞の教室に通わせてくれたり、旅館の仲居さんをした事のある人に、お花やお茶を教えてもらうように頼んでくれたりした。

もちろん、ウチが貧乏なのは変わらない。
日舞の先生のところじゃ、「きったない服！」って散々バカにされたし、お花やお茶を習っていても、「やっぱりお郷がお郷だと・・・ねぇ」と、ため息をつかれたりしたけど、
お父ちゃんが、一生懸命頭を下げてくれたんだ。
私のために、甘いもんも週に3回食べるのを1回に減らしてくれたんだ。
そう思って、我慢して通い続けた。

私は調子がいいから、そのうち日舞の先生から「おいもちゃん（ウチが芋を作っているから）」と呼ばれて可愛がられるようになった。
別の生徒からは「何あの子、家が貧乏だからって、先生から同情されちゃってさ」とか言われたけど、気にしてない。
だって、芋を作っている事は全然恥ずかしい事じゃない。
食べ物がなかったら、人間は生きてはいけないじゃないか。
それにウチの芋は、とっても甘くておいしいんだ。
このまえ町長さんにだって褒められたんだから！！
とにかく、日舞の先生が、「おいもちゃんとお父様に」と、宝塚のチケットをくださった。

衝撃だった。

あんなに華やかな世界が、この世の中にあるなんて。

きれいなドレス、カッコいい燕尾服、タカラジェンヌのすらっと伸びた手足、男役さんのキリッとした瞳…
私は表現力がなくて、言葉じゃ全然言い表せないけど、そこは確かに「夢の世界」だった。

お金がなくて、いつもの薄汚れた服で観劇したんだけど、それでも観ている間は、私もその「夢の世界」に確かにいたんだ。

舞台が終わっても夢の世界から帰りたくなくて、お父ちゃんと二人、劇場の入り口でぼぉっと歩いている人たちを眺めていた。
「きれいだったね・・・」
「そうだなぁ」
「夢みたいだったね!!」
「そうだなぁ・・・」
一生懸命舞台の楽しさを語りあいたいんだけど、私もお父ちゃんもあまりの衝撃にとにかく頭がおっついていかない。
ただ、一言二言、感想を私が言って、お父ちゃんが相槌を打つ程度だった。
けど。

「ちょっとそこ!!どきなさいよ!リュータンさんが通れないじゃない!」
後ろからいきなり肩を押されて、私は体がよろめいてしまった。

「な、何するんだ!!」
お父ちゃんが声をあげてくれたけど、
「タカラジェンヌの、しかもリュータンさんの通り道にいるあなた方の方が悪いのよ!ここは関係者の玄関よ、ちゃんと書いてあるでしょ!字も読めないの貧乏人!!」
と、綺麗なワンピースをきた女の人が見下したように言い放って、

嘲笑う。お父ちゃんは、何も言い返せなかった。
私は習ったから読めるけど、お父ちゃんは学校に通う間がなくて、字が読めない。
…私が気づくべきだったんだ。
悲しくて、悔しくて、申し訳なくて…涙で目の前がかすんできた。
でも。

「あほ！あんたらなに言うてるの！！」

もう、涙がこぼれる寸前だったけど、そんな涙も引っ込んじゃう位大きな声がきれいでキッツい女の人たちの笑い声を遮ったんだ。
「・・・リュータンさん・・・」
「あんたら、お客様に何言うた！？もう一度、私の目の前で言えるか！？」
「・・・」
リュータンさん、と呼ばれた女の人の剣幕に、私達を嘲笑った女の人たちは声も出ない。
「私らタカラジェンヌが、なんでキレイなドレスや燕尾服着て、舞台に立てるかわかってるんか！？
わかってへんやろ。ほなしょうがないから教えたる！私らはなぁ、お客様が、お金を払って舞台を見に来てくださってるから、だから舞台に立てるんや！！」
髪を振り乱して、大声をあげて、リュータンさんは怒っている。
でも、そんな姿でもキレイだと、そう思った。

「タカラジェンヌは宝石や、なんで宝石かわかるか！？お客様が大切にしてくださるから宝石なんや、指輪と同じように、着物と同じように、普段食べたいもんもやりたい事も我慢して、それでも舞台に見に来てくださる、だからこそ！タカラジェンヌはお客様の宝石

や！！それもわかってへんやろ！！」

「リュータンさん…」

「あんたらに親しげに呼ばれとうない、タカラジェンヌにあんたらみたいな人間は必要ない、今すぐ雪組から出て行って！！」

「・・・っ、すいませんでした！！」

女の人達はそう言って泣きながら走り去ったけど、リュータンさんはもうそっちなんか一瞥もしないで、私達の方に歩み寄ってきた。

「あ…」

「ウチの組の者が、大変失礼いたしました。全て、この雪組トップ嶺野白雪の監督不行き届きです。大変申し訳ございません」

「…いえ、こちらこそ、道をさえぎってしまってすいませんでした」

「お客様が謝る事なんてないんです。今日の公演、前の方でご覧になっていただいてましたよね？お二人とも、本当に真剣に観ていただいていたので、わたくしも身の引き締まる思いで演じさせていただいていたんです。それなのに…不快な思いをさせてしまって、申し訳ございませんでした。」

「！私達が見えていたんですか？」

「全てのお客様のお顔を確認するわけではないですが、印象的な方は記憶に残ります。いつも最善の演技を、と心がけてはおりますが、今日は特に身の引き締まる思いでしたよ」

にっこり笑って話すリュータンさんのおかげで、もう私は悔しくも悲しくもなくなっていた。

だって！リュータンさんが、あの夢の世界の人が、夢の世界の中で、私を見ていてくださったんだもの！！

「あ、あの！！」

「何でしょう」

「あの、今日は、本当に楽しかったです！！すごく、凄く素敵で、

お父ちゃんと二人で、まるで夢の世界だねって、さっきも言っていたんです。私、私絶対また来ます！何度でもきます！！」
言いたい事の半分も言えなかったけど、とにかく感動して、また来たい、それだけが伝えられればと思った。もしかしたら所々声が裏返って上手く聞き取れなかったかも。
それでもリュータンさんは
「ありがとうございます。ぜひまたお越しください。お二方のお越しをお待ちしております」
そう言って、にっこり笑ってくださったんだ。

だから、私はリュータンさんが好き。
いつだって、今だって「タカラジェンヌの嶺野白雪」は永遠だと、そう思う。
私の心の中には、いつもあの日「待っている」と言ってくださったリュータンさんがいる。
今は、目の前に幸せに笑う燕尾服のリュータンさんがいる。

私の「タカラジェンヌ」は、リュータンさん、その存在そのものの事なんだ。

青春の終わり（後書き）

紅好きです。
紅の想像だけはものすごくしていて、実はこの話終わってない。
どうしよう、終わりまで書けるかな…

青春の終わり　2（前書き）

ドラマのあらすじや紹介では、紅は『ベニ』です。『紅』ではありません。
要するに私の表記が間違っています…
単純な間違いが原因ですが…実は私が『ベニ』より、『紅』という字面の方が好きである、というのもあったりします。
なので、この話の中では『ベニ』は全部『紅』表記で統一しちゃいます。
ご了承ください。

青春の終わり　2

それから私は、お父ちゃんにお願いして、宝塚を受験することにした。

周りの皆は「まつが宝塚になんて入れるはずない」と笑ったけど、お父ちゃんは違った。

「やっと、まつの生きる道が見つかった！まつのためなら、お父ちゃんなんでもしてやるからなぁ」

って、今まで以上に頑張って、お花とお茶の代わりにバレエに通わせてくれるようになった。

あと、味方はお父ちゃんだけかなぁって思ってたけど、実際殆どの人は味方じゃなかったけど、一人だけ、意外な人が味方になってくれた。

「おいもちゃんなら、きっと『行きたい』と言いだすと思ったわ」

と、はんなりと笑った日舞の先生だ。

「どうしてですか？」

と私が聞いたら、先生はニコニコと嬉しそうに答えた。

「おいもちゃんは、きれいなモノが好きだもの。きれいな着物、きれいなお顔の人、きれいなお庭、きれいな心根の人…そんなおいもちゃんが、宝塚を見たらきっと大好きになって、『私も、あのなかで踊りたい！』って言うに違いないと思ったの」

予想が当たって嬉しいわ、と。

それから、こんなことも教えてくれた。

「おいもちゃんは、花嫁修業の一環でここに通ってくる生徒さん達より、よっぽど踊りの才能があると思うの。わたくしのところにず

っと通うよりも、いずれは踊りでお給金をいただけるような、そんな人になればいいなぁと、そう思っていたのよ」
でも正直な話、先生のところでは師匠になれるほどの練習はさせてもらえないらしい。
「わたくしの力量や、教える時間がない、というのもあるのだけど…何より個人指導になってしまう事が問題なのよ。おいもちゃんは個人指導を受けれるほどの台所事情ではないでしょう？指導料を頂かない、ということも考えたのだけど、それでは他の生徒さん達に示しがつかないし…」
要するに、お金の話らしい。
確かに、先生がご好意で安く個人指導してくれたとしても、周囲に気づかれてしまえば「なんでまつだけ贔屓するんだ」ということになってしまう。
それは私が我慢すればいいだけかと思ったんだけど、先生はそれだと「おいもちゃんがお教室を持った時に、『まつは贔屓で先生になったから』と生徒さんが来なくなる」と、心配していらっしゃったんだって。

「でもね、宝塚ならいいと思うのよ」
「なにがですか？」
「宝塚では、生徒の間でもお給金が出るし、何より踊りの指導も無償で受ける事が出来るの。タカラジェンヌでいる間に、日舞の免許皆伝をいただいて、退団してからお教室を持つ方だってたくさんいるわ。それなら、かえって箔がつくし、おいもちゃんにピッタリだと思ったのよ」
先生はそこまで考えて、私に宝塚の券をくださったんだ。
感激して涙が出ちゃった私に、先生は今度はうきうきと言い始める。
「おいもちゃん、先生芸名も考えたの」
「…っまっ、まだ、はやくっないですかぁっ…」

私は涙で言葉が上手く出てこないけど、先生はそれでも「大丈夫よ」と続けた。
「わたくしが手塩にかけるおいもちゃんですもの、きっと合格するわ。あのね、芸名は…

『紅花ほのか』

がいいと思うの」

紅花ほのか・・・
「紅花はね、花言葉は「情熱」女性の口紅にも使われているのよ。少しおしゃべりすぎるけど、正義感のあるおいもちゃんにピッタリだと思わない？」
でも、紅花は末摘花とも言うでしょう？
「源氏物語ね？よく知っているわねぇ。でもね、彼女は確かに不美人と言われているけど、その分実直で、一途に旦那さまを思っていた純真な人なの。
おいもちゃんも、タカラジェンヌの中では少し華のない印象になってしまうかもしれないけど、宝塚に一途で、純真にあり続けてほしいって思うの」
よく考えてあるでしょう、と先生はどこか得意げだ。
「ほのかはね、『ほのかに香る』なんてよく言うけど、「いつも私をどこかで香っていてください」という意味で考えたの。『紅花を、いつもどこかでほのかに香っていてくださると嬉しいです』という意味よ。タカラジェンヌの芸名は、退団まで変わることはない。だからこそ、苗字にかけて名前を考えられるのよね」

これからは、私おいもちゃんを「紅」と呼ぶわね。
おいもちゃんはもう、卒業ね。

そう言って先生は、その日から私の事を「紅」と呼びだした。
だから、私の芸名は『紅花ほのか』
たくさんのタカラジェンヌの中でも、受験する前から芸名が決まっていた生徒なんて珍しい、というかほとんどいないに違いない。

っていうか、もうこうなったらタカラジェンヌにならないと恥ずかしい！！

先生に上手く発破をかけられた形で私は猛練習をして、見事宝塚に合格することになったのだった。

青春の終わり　2（後書き）

タカラジェンヌの芸名は、古くは百人一首からつけられたようです。
でも、ネタが尽きて今のように生徒が考える形になったみたい。ドラマでは、タッチーも昔の本名だったし、もうネタが尽きた後だったんでしょうね。
あ、紅の芸名の理由、もちろん適当です。

青春の終わり　3（前書き）

そろそろ勢いがなくなってきました。
…てか基本的にドラマの最中の話は書くつもりがないのに必要に迫られて書かなきゃいけなくなる事がダメな要因なのかも。

青春の終わり　3

晴れて宝塚の生徒になって。

タッチーやエリ、トモに出会って、音楽学校の生徒として一緒に頑張ったり、たまには喧嘩したりして。
色々あったけど、ようやっとタカラジェンヌになる事も出来た。

正直、もしかしたら頑張れないかもと思う時もたくさんあった。
2年間の間に同期の生徒はひとり、また一人と、確実に減っていったし、私だって何回「向いてない」って言われたかわからない。
長期休暇の時は必ず実家で泣きごとを言い続けた。
でも、
「まつ、一度決めた事をやりとげねぇヤツは父ちゃん許さねぇ」
「紅ちゃん、ここまで頑張れてこれたじゃない。あと少し頑張ればタカラジェンヌになれるのよ」
って、お父ちゃんに喝を入れられ、先生に励まされながら、乗り越えてきた2年間だった。

初舞台は、憧れのリュータンさんの雪組！
すごくすごく、気合を入れて臨みたかったのに、タッチーに盗み食いされ、エリには怒鳴られて、トモには見下された気がして大喧嘩してしまった。
結局リュータンさんに
「舞台の上で絆創膏つけるな！あんたら舞台なめとんのか！！」
って怒られて…

最初っから落ち込んじゃって、もう涙が出そうだったけど、同期全員で謝りに行った時、リュータンさんが

「あんたの目、かまぼこみたいやな」
と、私に「かまぼこ」ってあだ名をつけてくださって！

ホントにうれしかった。
リュータンさんは、私と初めて会った時の事、きっと覚えてないに違いない。
たくさんお客様がいるのに、その中のたった一回だけ言葉を交わしただけの私の存在なんて、覚えていられるほど印象深くはないはずだもの。

でも、あの出来事は私の宝物、それだけでいい。

これから「かまぼこ」って呼ばれながら、リュータンさんの記憶に残る後輩として、清く正しく美しいタカラジェンヌになれれば、それでいいんだ！！
そう思った。

タカラジェンヌになってからの毎日は、めまぐるしく過ぎ去った。
まだまだ駆け出しの下級生だから、毎日ほんとに忙しい！
でも、もともと体を動かす事は好きだし、きれいな洋服を着れて、美味しい食事も食べる事が出来て、なによりリュータンさん達みたいに見た目も心もきれいな人たちに囲まれる毎日は私にとっては本当に天国にいるかのようだった。
「紅はホント、悩みがなさそうねぇ」
羨ましいわ、とエリにはどこか馬鹿にするように言われたけど、それだけは
「そうよ、私幸せだもん！」
と、胸を張って言える。
エリはサルトルさんとボーボーさん（リュータンさんもそうだけど、私も横文字の人の名前は舞台以外で覚える事が出来ないタイプだ）

の真似をしようと努力のしすぎなのよ。
私みたく自分に正直に生きていれば、嬉しい時はホントに楽しくなるし、悲しい時は思いっきり発散できるから、自分の内にため込み過ぎて辛くなるなんて事はないのに。

でもね、そんな私でも悩むことぐらいある。

リュータンさんとデュエットできるチャンスが、トモに横からかっさらわれた事。
だってトモは、男役なのに、娘役の代役を「やりたい」って言ったのよ？
男役に決まった時はすっごく嬉しそうにしていたくせに、娘役の役を取るなんて、信じられない。
悔しかった。
私、最初っから娘役志望だったのに。
いつか、リュータンさんと一緒に踊るのを目標にしてこれまで頑張ってきたのに。
ようやくその夢が叶いそうになったのに、ぬか喜びで終わった事が、悲しかった。

…でも、それ以上に。

「かまぼこの踊りは完ぺきや。でも、重い！」
一緒に踊ろうという気にならへん、合わへんねん。
リュータンさんにそう言われた事。

私は、リュータンさんとは「合わない」
『踊りが重い』
その事実が、一番、辛かった。

青春の終わり　４（前書き）

今日はちょっと短いですが、区切りがいいので。
少し無理やりチックですが、おさむ君登場です。

青春の終わり　4

そもそも私は踊りは日舞から入ったし、実はバレエやタップなんかの外国の踊りが得意じゃない。
タップで「踊りが重い」と言われた事は、自分でも感じていた事だった。

でもそれを、リュータンさんから指摘を受けたのがきつかったなぁ。
きっと私、リュータンさんの相手役にはなれない。
そう思うと、悲しくて辛くて悔しくて…少し泣いちゃった（実は盛大に泣いちゃった）
けど、タッチーに励まされてなんとか舞台に立ち続ける事が出来た。

同期って、不思議。
励まし合って頑張る時もあれば、競い合って役の取り合いをする事もある。
でも、やっぱり何かあると自然と集まっちゃうんだよね。

トモの事、やっぱり悔しいし、嫉妬したりとか色々あるけど、嫌いになんてなれなかった。
タッチーやエリと自主練しているところをみると、私も思わず入りたくなっちゃう。
ずっと一緒に頑張ってきた同期だもの、踊りだすと自然に笑いあう事が出来るんだよね。

「私、娘役に転向する。そして、リュータンさんの相手役になるわ」
同期の私達に向かってそう宣言したトモ。
羨ましいし、自分がなれなかったことが悔しくもあったけど、
でも、同期だし応援しよう、そう思う気持ちも確かだった。

「紅ねぇちゃんは強いなぁ」
時々宝塚劇場の近くでマンガを書いているおさむ君に、そんな話を取りとめなくしていると、おさむ君はこんな事を言った。
「紅ねえちゃんは、辛いことや、苦しい事があったら、最初はホントに大騒ぎになるんやけど、最後にはいっつも笑顔で乗り越えてるんや。ぼくは、そういう人は強い人やと思うで」
「そうかなぁ？自分ではよくわからないよ」
「うん。そういう事は、自分では良くわからんもんや。でも、周りの人はそのねぇちゃんの性格に救われてると思うで。
真面目で、自分の信じる道に妥協ができなくて、人にやさしくしたいのについキツイことばっかり言ってしまうような天邪鬼な人間は、紅ねぇちゃんが傍にいるとふっと安心する時があるんとちゃうかな…。
ぼく、自分の書くマンガにそういうキャラクターを書きたいと思ってんねん！」
まだ先の話やけどな。そう照れくさそうに言って、おさむ君はまたノートにマンガを書き始めた。
「へぇ…、ねぇ、そんなキャラクターのいるマンガが書けたら、おさむ君私に見せに来てくれる？」
「うん、ええよ！先に医者になってからだから、大分先の話やけど、約束な！」

トモが娘役トップになって、しばらくして。
エリのファンだった清さんに赤紙が来て、清さんは戦争に行ってしまった。
大劇場も、閉鎖された。
でも、私はいつでも元気でいる事に専念した。
それは確かに私自身の性格でもあったんだけど、おさむ君と話した

この日の出来事が、私の中にずっと残っていたかもしれないなぁ、
とも思う。

私が傍にいる事で、少しでも元気になったり、安らげたりする人が
増えたらいいな。
舞台でも、いつもの生活の中でも。

青春の終わり　４（後書き）

ちなみに、おさむ君の言っているキャラにはモデルがきちんといたりします。

青春の終わり　5（前書き）

紅の話はこれでいったん終わります。
長かった…

青春の終わり　5

戦争が激化して、
何もかも我慢しなくちゃいけなくなってしばらくの間の事は、正直思い出したくない。
良かった事は、死んじゃったと思っていた清さんが戻ってきた事くらいだった。

トモは死んで、
タッチーが好きになった速水中尉は人間魚雷として戦死して、
リュータンさんは酷い火傷を負って。
みんな、宝塚からいなくなった。

戦争って、何なんだろう。
戦争に勝ったら、何が得られたんだろう。
戦争に勝っていたら、
トモは大劇場の舞台の上で死ねたんだろうか。
速水中尉は戦地から戻ってこれたんだろうか。
リュータンさんは酷い火傷を負わなくて済んだんだろうか。

「そんなのわからん」
涙を流しながら訴えた私に、おさむ君は呟いた。
「戦争に勝ったかて、きっと空襲はあったやろ。そしたらやっぱり、空襲で焼け出される人はいるはずや。大劇場だって焼けて使い物にならなくなってたかもわからん。リュータンさんも別の場所で怪我してたかもしれん。
戦争に勝ったかて、攻撃にはいかなあかん。速水中尉かて、人間魚雷にはならんでも、戦死する危険はあったはずやし。
…戦争に負けたから、こんなに辛くて苦しい生活になってしまった

んじゃなくて、戦争をしたから、こんなに辛くて苦しい生活になったんとちゃうやろか」

戦争なんて、しなければ良かったんだ。

そうしたらいつまでも、いつまでも、宝塚で、舞台の上で、
リュータンさんや、タッチーや、エリやトモ、みんなで。
永遠に「タカラジェンヌ」として輝けていたかもしれないのに。

戦争は終わった。

リュータンさんは退団して、影山先生と披露宴を挙げた。
エリはもう退団して、清さんと新しい生活を始めている。
トモは…「もう空襲はないから」と、近々納骨式をするらしい。
タッチーは雪組のトップになる。

じゃあ、私は？

私はどうしたらいいんだろう…

「かまぼこ！食うてるか！？」
「リュータンさん！！…食べてますよぅ。お肉とっても美味しいです！！」
ちょっと考え事をしてたら、燕尾服で披露宴の招待客をもてなして

いたリュータンさんが、声をかけてくれた。
いけない、せっかくの目出度いお式なのに、暗い顔しちゃってたかな？
ちょっと反省しながら、急いで笑顔を作る。
「そうやろ、そうやろ！この日のために、神戸中の肉屋を掛けずり回って用意させた極上の松坂牛や！
…思い出すなぁ、あんたらの初舞台ん時も、この店で、こうしてみんなですきやき食うたんやったなぁ」
楽しかったなぁ、と、どこか遠くを見るような目で、懐かしそうにリュータンさんが言った。
「覚えてくださってたんですか？」
「当たり前やろ！私はトップスターやで、トップっちゅうもんは、下の者が何も言わんでも、下の者の気持ちを思いはかって動かなあかんねん。そのためには、色んな事をちゃんと覚えておかなあかん！…けどまぁ、あんたらの期は特別や」
そう言って、リュータンさんは少し寂しそうに笑った。

「トモが、いたしな」

「……」

「それに、私の次を任せるタッチーもいる」
「そうですね」
「かまぼこもいるやないの」
「……え？」

まさか自分の名前が出るなんて思ってもみなかった私は驚いた。

「あんたらの期は確かにスター候補がたくさんいて、かまぼこは踊りが結構上手いのに、目立てなかったところはある。でもな、かま

ぼこ、あんたにはあんたの良さがちゃんとあるんやで」
「リュータンさん…」
「確かにあんたの踊りは重かった、けど完璧やった。私の踊りには、…もしかしたらタッチーの踊りにも、あんたの踊りは合わんかもしれん。私もタッチーもバレエから習い始めてるしな。
でも、あんたは『完璧』なんや。それがどんなに重要か、わかるか？」
ほら、もっと肉食わんか、とか言って私のお皿にお肉をのせながら、リュータンさんは言い続けた。
「『かまぼこに後ろ任せておいたら安心や』毎回そう思いながら舞台に立てるんや。
私は天下のリュータンや、自分だけなら完璧や、自信がある。でも、後ろも完璧なら最高やないの！あんたがいるおかげで、お客様にはいつも前も後ろも完璧な舞台を提供する事ができたんやで」
それってすごい事やろ、なぁ？と言われたけど、答える事が出来なかった。

涙が出てきた。

口をあけても、嗚咽しか出そうにない。…返事なんかできそうにない。

「……っ、リュっ、…タンさん、わたしっ」
「なに泣いてんの、しゃきっとしぃ。…あんたかて、次の娘役トップ候補なんやで」
わたるさんに聞いたんやけどな、と、影山先生とタッチーの方を見ながらリュータンさんは続けた。
「どうも次の娘役トップ、もめてるみたいやな。…あんたらよりも下級生は戦争で、どうも上手い事育ちきれてないし。あんたらの期も、まだ戻ってこれるかどうかわからん生徒も多い。なにより、タ

ッチーに合いそうなのがどんなタイプかがわからんみたいやな、戦時中でロクに公演もできへんかったし」
「……」
「それでもタッチーは決定や、他に人気のあるジェンヌはエリくらいやったけど、既に退団してるし、なによりこのリュータンが認めてるんやしな！…まぁ、しばらくは娘役トップは何人かで回しながら、という事になるんやろうな」
だから、しゃきっとせなあかん。

「それに私かて、今日は一つの『区切り』の日や」
「…え？」
「『くーぎーり！』嶺野白雪も、リュータンも永遠や！…でも、もう『タカラジェンヌ』ではない。
わたるさんと結婚したしな。乙女ではなくなったなぁ？」
ニヤニヤ笑って首をかしげたリュータンさんをみながら、少し顔が赤くなってしまったかも。
…乙女じゃなくなったって、そんなあからさまに言わなくても…
「うちは退団公演はせぇへん。このキズを恥ずかしいと思うてるんやないで？ただ、お客様にとっての『宝塚の嶺野白雪』は、あくまでも火傷のなかった頃のうちでありたいと思ってる。その代わりに、今日の披露宴を開いたんや」
「リュータンさん…」
「大好きだった大劇場の代わりに、大好きだったこのすき焼き屋で。大好きだった、もう着る事のない燕尾服を着て。これから寄り添って生きていくわたるさんと一緒の晴れ舞台を、あんたらに焼きつけることが、このリュータンの『退団公演』や！」
だから、泣くんやない、あんたもしゃきっとして肉でも食っとけ。
リュータンさんはそう言って、他の招待客の方に行ってしまった。

私は…

私は。
嬉しさと、戸惑いと、ごちゃごちゃで。
整理もつかなくて、地に足もつかない感じで、でも。
でも。
ああ、やっぱりリュータンさんはカッコいい。
私もリュータンさんみたいに、強くありたい。
今はまだ、何をしたらいいのかよくわからないけど、それでも。
リュータンさんみたいに、今日のこの日を『区切り』にしよう。
戦争をしてしまったから。
戦争に負けてしまったから。
友が死に、知人が死に、大勢の人と別れ、孤独を感じてしまったから。
だからあの「楽しかった日々」を懐かしんだり、後悔したりする繰り返しの中で埋もれていくだけになっている自分にサヨナラしよう。
「リュータンさん！待ってくださいよう、私そっちのお肉も食べたい！！」
青春は、終わった。
キラキラしていた、少女だった日々は終わった。

でも、私は。

いつまでも、「紅花ほのか」で、「紅」で、「かまぼこ」
それでいい。

もう始まっている「今」を、
自分らしく、たくましく。
いつも胸に秘めている「清く、正しく、美しく」のタカラジェンヌ
らしさも忘れずに。
明日に向かって、前を向いて顔をあげて歩んでいこう。
青春が終わっても、私は私らしく歩んでいくんだ。

そう決意した、秋の良き日。

青春の終わり　5（後書き）

この時代、まだ主演男役、娘役のトップ制も、退団公演も制度化、習慣化されてないようです。
しかしドラマでは「退団公演」「トップ」という言葉が使われてるのでよしとしてください（笑）

新たな生活（前書き）

次はエリの話です。

舞台では時間の関係からか、エリがいなくて寂しいですよね。

新たな生活

戦争は終わった。

…とは言っても、私にとって戦争なんて勝っても負けても既に終わったようなものだった。

そりゃ、空襲があったり、配給が少なくて飢え死にしそうだと感じたり、色々辛い事はあったけど。

清志さんが戻ってきた、それだけでもう、私の『辛い戦争』は殆ど終わったと思う事ができた。

人はいつ死ぬかなんてわからない、

空襲があったってなくたって、明日も生きてるかどうかなんて誰にもわからない。

けど、それでも。

どこかの戦場で、私の知らない場所で、私がわからないうちに死んでしまうのと、

私の見ている場所で、私が傍にいるところで、静かに死んでいくのとは全然意味合いが違う。

私は欲が深いのよ。

生きてるうちも、死んでいくその時も、私の一番のファンであるあの人が、私の傍を離れていくなんて許容できないの。

「この人と結婚する」

父と母にそう宣言した時は、そりゃもの凄い反対を受けた。

「なによ。『宝塚なんて早くやめて、嫁に行け！』って、あんなに言い続けていたくせに」
「それとこれとは話が違う！こんな手に職もない、足すら片方ない若造に、大事な娘を嫁にやる親がどこにいると思っとるんや！」
「清志さんには『画家になる』っていう大きな目標があるわ！私の事、一番きれいに書いてくれるのは彼だもの！それに、彼の足には私がなるの、なんにも困る事なんてない！！」
「やかましい、このスカタン！娘は娘らしく、黙って親の言ったトコに嫁に行けばええんや！お父ちゃん許さへんからな！！」
「別にいいわよ、お父ちゃんたちに許してもらわなくっても立派にやっていけるもの！！
ほな、さいなら！！」
行くわよ清志さん！と、家に入ってモノの数分で、私は清志さんを引きずって家を飛び出してしまった。

今思えば、清志さん
「あ、あのっ、辻清志と申します！えと、今日は、エリさんと、お嬢さんと結婚させていただきたいと」
までしかしゃべらないうちにお父さんに
「ゆるさーん！！」
って言われてから、終始無言だった。
…清志さんらしい。
フフフ、と思い出し笑いをする私に、清志さんは怪訝そうに
「どうしたの？」
と聞いてきた。

「お嬢さんをくださいって、言わなかったのね」
私はちょっと話を逸らしたけど、清志さんはそれには気づかず「ああ」と、とうなずいて
「だって君、モノみたいに扱われるの好きじゃないでしょ」

と言った。
「ください、って言おうかな、なんて言おうかなと思った時『私はモノじゃない！』って言ってる君が目に浮かんだんだ。確かに、君はモノじゃない。僕の大切な『奥さん』だよ。ください…って、モノのように言うんじゃダメだよなぁと思ったんだ」
でもさ～、と困ったように続けている。
「実際、日本語って不便だと思ったね。じゃあどうご挨拶をしようかと考えても、『結婚のご挨拶』じゃ、許可もなくもう結婚かよって話だし、でももう結婚するのは決めてるんだし、なんだかなぁ…と思ったんだけど。
結局、『結婚させていただきたいと思い、お許しを頂きたくご挨拶に伺いました』って言う事にしたんだけど」
全部言えなくて、残念だったね。
そう、ちょっと寂しそうに笑う清志さんを励ましたくて、私はわざと大きな声で言った。

「気にすることないわよ！ウチの父親、気分屋だもの。孫でも生まれたらきっとヤニさがってなし崩しに出入りできるようになるわ」
「…そうなの？」
「うん、だってなんだかんだ言って私には甘いもの。娘は私一人だし、兄の子供は兄嫁が離さないからそれほど可愛がれないって、母も言ってたし」
きっとメロメロになるわよ。そういうと、彼も少し気分が浮上してきたようで
「そうなるといいね」
と笑ってくれた。

そんなこんなで、私達はどちらかというと宝塚に近い少し田舎くさい街で新婚生活を始めた。
親からの助けがないようじゃ、別に実家の近くに住む必要はないし、

だったら、同期や知人、友人の多い宝塚の近くの方が、親しみもあるし、色々助かる事が多い。
「あんたもゲンキンねぇ」
トモが生きてたらそう言って笑うかもしれない。
うるさいわね、だって宝塚が好きなんだもの。別にイイじゃない、宝塚の傍にいるくらい。

今だって、宝塚の舞台に立てるものなら、立ってみたい。
でも、それと清志さんのお嫁さんになるのを天秤にかけるとしたら、どちらかしか選べないとしたら、
清志さんのお嫁さんになりたい。
それだけのことだ。

実際、暮らしに困る事は実はさほどなかったりもする。
清志さんは戦争で負傷したから、『増加恩給』の対象になっていて、要するに国からお金がもらえるのよ。
あんな風に気が弱い人だったから、上司にはこき使われていたみたいだけど、その代わり上司も、清志さんの足がなくなった時には、「最大限困らないように」って色々と便宜を図ってくれたみたいで。
敗戦間近、一番なし崩しに色々ともらえなくなりそうな時期だったにもかかわらず、もらうべきものはきちんともらえる状態で帰還させてくれたらしい。

あとは食べるもので、こればかりは農家に知り合いもいないし、少し苦労するかなぁと思ったんだけど。
「まつの仲間はオラの娘と同じようなもんだ。困った時は、お互いさまだぁ」
と、なんと紅のお父様が自分の家で作っている食べ物を分けてくださったりとか。
「エリさ～ん、おすそわけですぅ」

と、下級生の子なんかも実家から送ってきた食べ物を置きに来てくれたりだとかするものだから、
まぁ、十分に食べられるわけじゃないけど、死なない程度には生きていけるわね。

こうして、上級生のお祝い事とかに呼ばれて、たらふくご馳走を食べたりすることもできるわけだし。

そんな事を考えながら、私はリュータンさんの披露宴で出されているすき焼きを、お腹いっぱいになるまで詰め込もうと努力しているのだった。
なにか、入れるものないかしら。
清志さんにも持って帰って食べさせてあげたいのだけれど。

「エリ、食うてるか！？」
「……っ、はいっ、リュータンさん、美味しく頂いてます～」
ちょっと食い意地のはった事を考えていた時に、リュータンさんが声をかけてきたので、思わずむせそうになってしまった。
なんとかむせずに飲み込んで、何度目かのご挨拶をする。
「こんなに立派なお式に呼んでもらえて、嬉しいです～…」
「そうやろ、そうやろ！このご時世、こんなに豪華に披露宴開けるのも、このリュータンと、宝塚きっての演出家のわたるさんだからこそや！
なかなか食べる機会もないんやし、今日は思いっきり肉を食うていけばええ、な！」
…いつも思うんだけど、この人なんでこんなに自信があるのかしら。
自信に見合った実力を兼ね備えていないとは言わないけど、それにしたってこのナルシストぶりはいっそ見事というものよねぇ。
まぁ、今日は本当にリュータンさんの言う通りだと思ったので、
「はい、遠慮なく～。ありがとうございます」

と、可愛らしく返してみた。

すると。

「あんたの旦那さんの清志さん？も、いずれわたるさんと同じ職場になるんやし？呼べれば良かったんやけどなぁ。まだ、正式に通達してへんさかい、呼べんかったんや、すまんかったなぁ」

なんと、リュータンさんがすまなそうに言ってくるじゃないの！！

「いえっ、おきになさらず！！まだホントに発表もされてませんし…」

そうなの。

清志さん、絵の力量を買われて、宝塚の美術部で採用されることにもなったの。

とりあえず、スターの似顔絵やポスター、大道具の絵の図案なんかを考える担当らしいけど。

「ホントに助かります。リュータンさんもお口添えくださったんでしょう、それだけでも十分なのに、これ以上何かしてくださったら、本当に何をお返しすればいいのか…」

「そんなに気にせんでええ。ウチは、エリに感心したからこそ、話を持っていったんやしな」

「え…？」

「あんたは、歌も踊りもお芝居も、まぁウチには及ばんけどまずまずやったし、トップになりたいって言う野心もあった。正直、あんたが今でも宝塚におったら、こんなにすんなりとタッチーがトップになる事はないと思うで？ファンの方も力のある方がおったしな」

惜しいことしたな、と声を掛けられたけど答えられない。

だって…、それでも私は…

「あんたが先に辞めるとは、思わんかった」

タッチーの方が辞めそうに見えたわ、と、リュータンさんは言う。
「あんたは、自分がトップになれる可能性のある事をわかってたし、タッチーにもその可能性がある事を理解していた。そやさかい、タッチーとはいつも切磋琢磨して、なんとか『同期で競い合いいがみ合う』んじゃなく『同期で競い合い助け合う』形を作ろうと、いつも努力してたやないの。
あんたがその気やなかったら、『いがみ合う』事は簡単やったやろ。
あんたは、気ぃが強いし、すぐ言い争いを起こしてまう。
私はな、あんたはそこを我慢してるんや、『自分のタカラジェンヌとしての理想の道』を決めて、突き進んでいるんやなぁ、と思いながら見てたわ」
「リュータンさん…」
「あんたのタカラジェンヌとしての成功は、自分の性格を曲げるくらい重要なんやと思ってた。
…その夢よりも、あの絵描きさんと結婚する方を選ぶとはなぁ…ビックリしたで」
そういって、リュータンさんは笑った。

「私には選べん道やった」
「そんな…リュータンさんは影山先生とご結婚なさったじゃないですか」
「怪我して、辞めてからな」
まぁ、その時に両想いになったから、てのもあるけどな。
どこか遠いところを見つめながら、リュータンさんは言った。
「あの時、まだトップやったあの時に、わたるさんから『好きや』と言われてもウチは信じきれんかった。
それだけやない、宝塚の乙女やのうなって、なんの価値もなくなった自分に、愛し続けてもらえるほどの価値があるのかどうかも不安やった。
『タカラジェンヌ』はウチの全てや。それを失うのは、怖かったん

や」

新たな生活（後書き）

もっと色々言いたい事はあるんですけど、とりあえず文才が足りません。

新たな生活　2（前書き）

エリの話は、これで終わります。
披露宴中の話は、あと2作ほど構想はあるのですが…

新たな生活　2

「怖かった、んですか…」

「そうや。怖かった。ウチは十ナン年もトップはり続けてきたんやで？今さら別の世界に飛び込むなんて、考えられへんかった。…恋の内は、夢のように想像で終るような間はいいんや。でもな実際、現実となると、『タカラジェンヌのリュータン』は、足がすくんで動けんようになるもんや。自分なりに驚いたでぇ」

ウチはこんなに臆病だったんかってな。

リュータンさんはそう言って、ちょっと寂しそうに笑った。

「ま、そんなこんなでウチはあんたに感心したわけや。

ウチに及ばずともタカラジェンヌとして誇りを持って生きているあんたが、『お嫁さん』を迷いなく選択したっちゅーことにな。

で、そんな選択をさせた清志さんは、素晴らしい『何か』を持ってるんやないかと思ったんや。

…ウチの絵ぇは、下手やったけどなぁ？」

と、最後は少しからかうようだったので、私はわざと笑って

「清志さんの絵は、自分に正直に描いた絵なんです～、だから、私が一番きれいに描けるんです～！」

と言い返した。

「こりゃ、あてられたわ～」

あはは、と、大声で笑いながら「ウチも旦那さまとイチャイチャしてこよ～」なんて言ってリュータンさんは去って行った。

リュータンさんが言ったこと、私だって考えなかったわけじゃない。

多分、清志さんが戦争に行かなかったら、私は清志さんと結婚しなかったと思う。
や、正直にいえば惹かれていた部分はあったから、いずれそうなったかもしれないけど、もっと、ずっと先になったはず。

だから、リュータンさんが感心する必要なんてどこにもない。

私はいつも、沢山の偶然や必然の中から、自分の好きな道をその時後悔しないように選んでいったにすぎないんだから。

それって、『自分は臆病者だった』と言っているリュータンさんにも言える事じゃないのかしら。

宝塚でずっと、永遠にトップであり続けようと思っていたのも。
偶然生まれた『恋心』に戸惑いながらも成就させようと奮闘していたあの時も。
『恋愛成就』より『タカラジェンヌ』であろうと考えた瞬間も。
一つの夢が終わり、新たな『結婚』という道に歩んでいる今も。
リュータンさんは悲しくても、辛くても、後悔だけはしなかったんじゃないかしら。
沢山の偶然と必然の中から選んだ自分の道を、誇りを持って歩く人だ、と、そう思う。

なんだかんだ言って、私の尊敬する先輩だもの。

私たちは、退団しても乙女じゃなくなってもやっぱり、『タカラジェンヌ』だわ。
清く、正しく、美しく。
どんな生活の中でも、不思議とそうありたいと思ってしまうのだと思う。

まぁ、でもね。
そんな私を私は好きだし、清志さんも魅力的だと思ってくれているの。
だから私は、新たな清志さんとの生活の中でも、
自分の中の『タカラジェンヌ』である心を失わずにおこうと思った。

「…やだ、すき焼きなくなっちゃう！」

「エリ～、すき焼き食べちゃうよ！」と大声で私を呼ぶ紅の声に、
「私の分くらい取っておきなさいよねぇ！！」
と、こちらも大声で返しつつ、私は笑った。

私、あの頃のままだわ。
新しい生活が始まっていても、
好きな人がいて、大切な友人がいて、尊敬できる先輩がいて、その中で。
キラキラに輝こうとしていたあの頃と、全く変わらない。
夢と希望に満ちている、野心のある『エリ』のまま。

その事が、嬉しくって、笑った。

秋の良き日。

決意（前書き）

間が空きました。

決意

戦争は終わった。

あの戦争は、日本に、俺たちに一体何をもたらしたのだろう。
日本は敗北しアメリカの属国となり、個人としては家族や友を失くし、財産を失った。

得たものより失ったものの方が多すぎる。
そんな中、俺は三国一の嫁さんを手に入れた。

「わたるさーん！！ちょっと、こっち来てぇ～！！」

嶺野　白雪。
本名は竜崎　薫だったが、俺にとっては芸名で付き合ってきた期間の方がより長く、また、呼び名としては「リュータン」の方が親しみやすい。実際、普段人前で呼ぶ時は今でも「リュータン」だ。
……ま、それに今の本名は『影山　薫』やしな。俺と結婚したんだから。

「なんや、どないした」
「ファンの方が、お店の前に来てるんやて。せっかくだからな、ウチの旦那さんを紹介しよ、と思って」
「そうか、ほな行こか」
「うん！！」

俺が腕を差し出すと、彼女は嬉しそうにその腕にからみついてきた。
（可愛いなぁ…）
リュータンは、俺と結婚する少し前からずい分「かわいらしく」な

った。
それは別に彼女が今まで可愛くなかった、というわけではない。
ただ、彼女は宝塚雪組の『主演男役』であったのだ。

ここ十数年間は特に、「かわいらしい」と言われるよりも、「かっこいい」と言われたい、そう思って生きてきたのではないかと思う。

実際、彼女はそこら辺の男など裸足で逃げ出すくらいに『男らしい』一面がある。
後輩が困っていたら、何はともあれ話を聞く。
時には叱責し、時には励まし、時には一緒になって泣きながら、なんとかして解決策を自分たちで見出していく。
後輩が助けを求めていたら、何が何でも助けてみせようとがむしゃらになって動き出す。
どんな逆境の時でも『タカラジェンヌ』である誇りと『主演男役』である責任を放棄することはない。
まぁ、割と思いこみが激しくて自分本位になりがちな側面もあるんやけど、そこを入れても「ついていきたい」というカリスマ性があるんやな、リュータンには。

だから少し前まではリュータンが『タカラジェンヌ』やなくなることなんて、想像できへんかった。
どころか、『主演男役』でなくなることだって想像できへんかったくらいやし。

それでもいずれ、老いは来る。華の命は短いものだと、花街にいたからこそ身に沁みて実感のあった俺としては、「退団することも視野にいれろ」と言ってみたこともあった。
その頃は本人にも実感がなかったからか、「リュータンは永遠や！」とかなんとか言ってうやむやにされてしまったけれど。

（まさか自分の嫁さんになるとは思わなかったしなぁ…）
と、隣にいるリュータンを見つめながら思う。

「…なに？何かついとる？」
「……や、リュータンの燕尾服も見納めかなぁと思うてな。…しかし今日もカッコええなぁリュータン」
そう。
こいつは何故か今日、結婚披露宴やのにドレスじゃなく燕尾服を着ているのだ。
全てはプロポーズした時にリュータンが、
「結婚式は燕尾服でもええ？披露宴はすき焼き屋でもええ？？」
と、泣きじゃくりながら聞いてきたのを（可愛いなぁ）と思いつつ
「ええよ！」
と答えてしまった自分の責任ではあるんだが…。

自分の容姿はそれほど不自由ではないと思いつつも、普段着なれてない燕尾服を着こなせる程の器量かと言われるとそれほどの自信もなく、
従って今まで数え切れない程燕尾服を着てきたリュータンの着こなしと比較されると少し…いやかなり…思う所があるのである。

それでも。
結婚して『乙女』という基準から外れてしまった以上、今日からリュータンは『タカラジェンヌ』ではない。
今のところ、俳優業をする予定もなく、だから今後男装をする必要性もなくなってしまうのだ。
事実上、リュータンの男装は、今日が見納めのはず。
実際、リュータンも少し寂しげに微笑みながらこう答えた。

「ありがと。…そやなぁ、この先燕尾を着る予定なんてないんやな…」
「…寂しいか？なんやったら、宝塚で教師の仕事、もらえるよう口利いてもええんやで？」
寂しそうなリュータンを見て、俺は用意していていつ言おうか迷っていた言葉を口にした。

顔にやけどのキズが残ってしまったリュータンには、今後俳優としての道はほとんど残されていない。
しかし、リュータンの今までの功績を考えれば、それくらいの優遇はされても良いのではないかと思う。
実際、エリの旦那の就職口も俺の口添えだけでなく、エリの今までの功績があったからこその話だったのだ。
まぁ、俺としてはもウチょっと新婚生活を満喫したいと思わないわけでもないんやけど。
だから少し、口にするのを躊躇ったりもした。
…が。

「ううん、いらん」

予想を反して、リュータンは首を横に振った。

「…なんでや？宝塚におりたいんやないのか？」
思わずそう訊ねた俺に、リュータンは「未練はないわけじゃないけど」と続けた。
「豪華な衣装も、贅沢な舞台装置も、オーケストラもみ～んな好きやしできたらもういっぺん『宝塚』の舞台にかかわりたいけど…ウチが続けたかったのは、『舞台俳優のリュータン』で『教師のリュータン』やないんや。もっと言うと、ファンや後輩の中の『雪組トップのリュータン』であった自分を崩しとうないんや。

…だから、燕尾も今日でお終いでかまへんの」
「…そうか。…それもそうやな、リュータンはずっと『雪組トップ』として皆の心の中に残り続けたらええと俺も思うで」
あくまでも、『主演男役』であった自分にこだわりを見せたリュータンの誇り・矜持に改めて感心しながらしみじみと答えた俺に、今度はリュータンはまぶしいばかりの笑顔をみせた。

「せやろ！？さすがわたるさん！！ウチの気持ちホント良く分かってくれるわぁ～！！」
「ああまぁな。なんせ『旦那さま』やしな」
「せやな！！それにな、ウチ、新しい目標もあんねん！！」
「……なんや？」

リュータンが元気になったことは喜ばしいが、リュータンが元気になって突っ走りすぎるとロクな事がない。
自分の現在の魅力を忘れて昔の演目を強引にやったこともあった。
すき焼きはこがしすぎるし。
俺とリュータンがくっついたきっかけも、気落ちする俺をリュータンが励ましたり褒め揚げたり、とにかく最大限の魅力で魅了してきたために、すっかりその気になった俺が押し倒してしまった事に起因している。
だから、少し構えて訊ねてみると

「かわいらしいお嫁さんになんねん！！」

と、随分かわいい事を言い出した。

「だってな、エリも『可愛いお嫁さんになります』っていったんやで！？あのエリが。

エリがなれるんやったら、ウチかてなれる、そう思うやろ？ウチかて、かわい～お嫁さんになって、わたるさんと仲のええ夫婦になるんや！！」

と、両手で俺の片腕に絡み付きながら話している。

あー、もう、可愛いな！！

気を抜くとすぐにやけてしまう顔をどうにか立て直し

「ほんなら俺は、『頼りになる旦那さん』にならなあかんな」

と言った。

「かっこいい『タカラジェンヌ』を一人損失させた挙句、かわいらしいお嫁さんを独り占めするんやもんな？」

「？わたるさんはもう『頼りになる旦那さん』やし、ウチはず～っとタカラジェンヌやで？」

「ウチは、ずっと宝塚にいたかった。宝塚から離れるなんて、嶺野白雪やなくなるなんて想像もつかなかった。…顔にやけどが出来て、退団せなあかんと思った時も、退団しても自分は嶺野白雪や～、と思っとったの。

…でもな、わたるさんが「結婚しよう、お前と結婚したいんや」て言ってくれて。なんや、こんな私でも、嶺野白雪でなくてもええんかと思って…。そんな風に思わせてくれるわたるさんが『頼りになる』って思ったからこそ結婚しようって思ったんやで？」

それにな、と、彼女は得意げに続けた。

「ウチは乙女やのうなっても、ずーっと心は『タカラジェンヌ』や。『清く、正しく、美しく』そうあろうと思ったからこそわたるさんが好きになってくれたウチになったんやし、ウチかてわたるさんが好きになってくれたウチが大好きや！

ウチはなーんも変わらん。生きてる場所が舞台からわたるさんの隣

になっただけで、やっぱりリュータンは永遠やな！」

ふいに涙が出そうになった。
リュータンが、彼女がそこまで俺の事を信頼してくれている事が、嬉しかった。
今まで、誰にも期待されず、戦争にも行かず、誰一人としてまともに守れなかったこの俺を、リュータンがそこまで想ってくれているだなんて。

「……せやな、リュータンは永遠や」
「せやろ～！！」
「ずっと俺の可愛いタカラジェンヌや」

赤くなって黙るリュータンの耳元で、俺はささやくように言った。

「幸せになろうな」

嬉しそうに頷く彼女を見ながら、俺は。

幸せな家庭なんて見たこともないようなもの、どうやったらなれるのかなんて想像もつかない。
けど、リュータンと幸せになろう。
幸せに、幸福に生き抜いて人生の最後には
「幸せやった」
と呟ける一生を、自分とリュータンに用意するために、どんな事でもしていこう。

そう、決意した。

そんな、秋の良き日。

空を、見て（前書き）

うーん、彼と彼女の名前を出さないのはわざと、だったりします。

空を、見て

戦争は終わった。

…とは言ってもまぁ、すでに儚くなった私にとってはあまり大したことでもない。

彼女はそんな天邪鬼な事を考えながら、それでも水面を見続けていた。

「釣れますか」

背後から聞こえた若々しい男性の声に、くすりとほほ笑んで答える。

「ええ、良いネタがたくさん入りましたよ」

一緒にいかが、と続けると、彼もまた楽しそうな声で「どれどれ」などと言いながら隣に座り込んだ。

「ああ、今日はリュータンさんの結婚披露宴でしたか」

すき焼き屋とは珍しい、しかも燕尾服同士ですか、などと、水面から伺えるあちらの世界の出来事を、楽しそうに話している。

「ホントにあの人は、『タカラジェンヌ』である事を誇りにしていましたから」

結婚式にまで燕尾服なんて、ほんとあの人らしいですよねぇ、と続ける彼女に彼も「そうですね」と返す。

「戦争が終わって、これでやっとあの方々も伸び伸びと暮らす事が出来る。…本当に、良かった」

どこか眩しそうにしている彼の視線の先には、タッチーの笑っている姿が映っていた。

「あそこに居たかった、とは思いませんの？」
静かにそう尋ねる彼女に、彼もまた静かに答えた。
「居たかった、と思わないと言えば嘘になります」

「…そうですね、ごめんなさい」
「いえ、いいのです。
…それに、居たかった、と思う事もありますが、実はさほど後悔はしていないのです。だからこそここにいるんですよ」
そうでなかったら、今もまだ海の底か日本のどこかで暗い顔をしながら彷徨い続けているはずでしょう？と、少しおどけながら彼は続ける。

「こうして、今ここにいる自分に対する満足感も、少しではありますが確かにあるのです。…日本は戦争に負け、何故あんな無駄な…人間魚雷や神風特攻隊などという作戦を決行したのかという思いも残らないでもないでしたが…。
それでも。あの時の自分には、愛する人を、愛する場所を、守るための手段はあれしか考えられなかった。
そしてその気持ちを彼女に伝える事もでき、実行に移す事もできた。あの激動の時代の中で、確かに色々と他にやりたい事はあったけれど、ああいった人生を送った事に自分は意外にも充実感を得ていたのですよ」

色々と後悔をした事もあるのだろう。
しかし、それを乗り越えた発言をしている彼に向って、彼女もあえて負の感情を呼び起こす発言はしなかった。
ただ、からかうようにこう言った。

「あら…お気持ちをタッチーにお伝えになったの？知らなかった」

すると彼も、にこりと笑って返す。
「ええ。熱烈に」
「まぁ。熱烈に？それはタッチーがこちらへ来たら、是非からかわないと」
そして水面に映るタッチーに向かい、「楽しみにしてるわよ」とささやく。

「しかし彼女は、新たな良い方と一緒になっているかもわかりませんよ」

彼はまだほほ笑んでいたが、それは彼女の目にどことなく寂しそうに映った。
「あら、意外にタッチーをご存じないのね？掛けてもいいですけど、きっとあの子、結婚しませんよ」
「…何故、そう思われるのです？」

「だってあの子、単純馬鹿ですもの」

「……」
「あの子は、タッチーは目の前の事で精一杯で、ちっとも他所事に目を向けれないんです。それは彼女の家庭環境がそうさせたのかもしれませんけど、でもあそこまでいけば元々の性格もあるのだと思います。
ホント、昔っからそう。
宝塚っていう居場所だけはなんとか確保しようとがむしゃらに努力して、結果的に成績が良くなっただけだし。
居場所が宝塚しかないっていう苦しさをなんとか脱却しようとして初恋に目覚めて、思わず「さらってけ」発言して相手に引かれてしまった事もあったわねぇ。
宝塚こそが自分の道だと、思ってからはまた一途にタカラジェンヌ

たろうと他所事に目を向けれなくなって、やっとこ本気になった初恋の君の思いなんか気づかずじまいだったし…
あなたに妻問いされてからは、あなたのことしか頭になくて思わず戦死しそうになるし…」

「…同僚をどんな目で見てたんですか、あなたは」
「それはもう、冷静に」

あきれ顔の彼に、にっこりと笑って彼女は続ける。

「それこそ人生の一番輝いていた部分を共有していたんですよ？あなたとは年季が違いますもの…その私から言わせていただければ」
そう、あの子はきっと。
「きっと、あの子はあなたの事を忘れたりしない」
「……」
「『熱烈に』思いを伝えあったのですもの、きっとあの子はその思い出を後生大事に、一途に心の中にしまいこんで生きていくのだと思います。
…それに、今は『宝塚　雪組主演男役』になったのだから、それで頭が一杯ね。きっと」
同期の友を想像して話す彼女は、まるでその光景が目に見えているかのように、歌うようにスラスラと、とめどなく話している。
「今は、宝塚のトップとして。それから先は宝塚の指導者として。戦後の混乱期でもありますし、宝塚も人材が不足しておりますもの。結婚しなくても、女の一人暮らしでも悠々と生きていけるのではないかしら。
…ですからあなたも、心おきなく待っていてよろしいんじゃないかと思いますよ？」

「そうで、しょうか」

「そう思いますけど」

和やかに歓談しているタッチーやリュータンの見える水面を眺めながら、

彼は不安そうに、彼女は少し呆れたように会話を続けている。

「しかし、どうしてそう思われるのか…。私は彼女に、「幸せになってください」と言ってしまったんです。いわば、「貴女を幸せにできる誰かを見つけるように」と、言ってしまったようなものだと思うのですが」

「男の方って皆そう。なんで結婚が女の幸せって決めつけるのかしら。…私達はタカラジェンヌですよ？演じる事でお金を頂いて、自力で生活する事もできるんです。あなたが現れる前は、タッチーはそうして自立していこうと考えていたし、あなたが居なくなった後は、宝塚で生き抜こう、と思っているようでもありますけど」

タッチー、今幸せそうに笑っているでしょう？と、彼女が言う。

「そうですね…」

「それに私、聞いたんですタッチーに。『どうせ私が先にあの世に行くから、あの人によろしく言っておきましょうか？』って。あの子、『そうしてくれる？』って言ってましたよ」

「え…」

「『私もいずれ、そちらに行きますから、それまで待っていていただけませんか』ですって。…なんで疑問形なのかしら、もう答えをいただいてもあの子に教える手段なんてないのにねぇ」

まぁ、でもね。

「だからあなたも、その気があるなら待っていてあげてくださいな。きっとあの子、たとえ年老いてこっちへ来ても、根性で若返ると思います。…今生では勤労女性としての一生を、来世ではあなたとの幸せな一生を、少なくとも今は望んでいる気がするんです」

そう言い終えて彼女は、少し心配そうに、そして期待を込めて彼を見た。
彼は、しばらく水面に映る件の彼の人を見つめていたが、やがてぽつりとつぶやいた。

「そうですね…私も来世では、彼女と名実ともに夫婦と呼ばれる関係になりたい、と思います」
「……！！」
「彼女には、幸せになってほしい。しかし今はそれが自分の力ではできないのがもどかしく、つい弱音を吐いてしまいましたが、今は彼女が幸せならいいのです。
そう、来世で、今度こそ私と共に幸せになっていただけるなら、今はいくらでも彼女を待つ事が出来る気がする」
「まぁ、熱烈ですわね」
「伊達に出会って数回で結婚を申し込んではいませんから。…実際一目惚れに近く、そして想いは相当深いのですよ。もしも彼女が今生で伴侶を得たとしても、こちらに来てからは情熱で奪い返そうと思えるほどには」
「ふふふ、なんだか楽しみになってきました」
「そうですか？…そうかもしれませんね」
待つ事は退屈かもしれませんが、未来を思えば楽しめそうですね、と彼らは顔を見合わせて笑った。

「ところで、あなたこそあちらに居たかった、とは思わないのですか？」

ひとしきり笑った後、そう尋ね返した彼に、「まぁ、ずいぶんと今さらな話」と言いつつ彼女は答える。

「そうねぇ、確かにあちらに居たい気持ちはありますけど…でも私、ずいぶんと満足してここに来たんです」
「ほう」
「死ぬなら、舞台の上で。そう願った俳優は数多いでしょうけど、実際にその願いがかなう俳優なんてそういないはずでしょう？でも、私の願いはかないました。…あの子たちのおかげで」
ホント、馬鹿な人たち。そう呟きながらも、彼女の瞳はやさしい。
「私はあの時、…正直その少し前からほとんど正気ではなくなっていて。痛みも苦しみも、頭のでき物のおかげかほとんど感じなくて、その代わり周囲の事も全く分からなくなっていて。それでも、最期に『舞台に出るよ』という言葉と、お客様の拍手だけは聞こえたんです。本当に私の望みを、あの子たちはかなえてくれた。」
最期は、本当に走馬灯が見えたのだと言う。
「ほとんど、あの子たちと過ごした日々の出来事で…私の青春の日々は、一番大切だった時期は、全部あの子たちと一緒にあったんだと思ったんです。……だから」
「……だから？」
「だから、できれば来世も一緒にありたいじゃないですか。そのためには、ちょっとくらい寂しくてもここで待ってようかなぁって思ってるんです」
けなげでしょ？
おどける彼女にしかし彼は優しく微笑むだけだった。
「そうですね…では、一緒に待っていましょうか。…大切な人たちを」
「案外待たされるかもしれませんよ～なんせ、皆図太いから」
特にタッチーなんて、ああいう子は案外長生きなんですよね～
そんな事を言いながら、それでも彼らは水面を見続けて、願い続ける。

どんなに待たされてもいいのだ、彼女らが幸せであるのなら。
ここは人生を終えた事に納得できたものだけが来れる空の上なのだから。
できれば幸せに、満足した人生を満喫してから来て欲しい。

ただ、たまには。
自分たちが話すように、彼女たちも自分たちの事を思い出して、そして
空を、見て。

そう、願いつづける。
そんな、
秋の良き日。

空を、見て（後書き）

これで第一部はおしまい。要するに結婚披露宴の時の話が終わりです。

あとはホント、構想としてはあるんだけど…

読んでくださる人がいるかどうか…

穏やかな日々（前書き）

お久しぶりです。

穏やかな日々

そして、穏やかな日々が始まった。

…なんて言葉は多分、一生、僕とエリさんの間では成立しないんじゃないのだろうか。

と、最近は思うようになった。

いや、受け入れざるを得ないというか…

とにかく、戦地から帰還して、エリさんと両想いになって、結婚して新婚生活を始めても、物語で言う

「そして2人は幸せに暮らしましたとさ、めでたしめでたし…」

なんていかにもそれから先は可もなく不可もない、穏やかな日々の始まりですよ、という言葉では言い表せない位の日常が、僕を容赦なく襲ってくる。

まず、エリさんは料理があまり…というか得意じゃない。

色んな知識を持っていて、

「家にいる書生に聞いたのよ」

なんて言うくらいだから、要するに書生を置けるくらいの経済状態の中で、一人娘に家事をやらせるなんて考えはご両親にはなかったみたいだ。

幸いなことに宝塚音楽学校では上下関係の厳しい寮生活を過ごしてきたから、掃除とか洗濯なんかは出来るんだけど、

料理だけは壊滅的。

本人に話を聞くと、
「料理は寮母さんがやってくれたのよねぇ。お手伝いのお当番はあるにはあったし、さぼったりとかもしなかったんだけど」
何故か料理をする機会がなかったのだ、と不思議そうに言うので、職場に行った時にそれとなく事情を知っていそうな人に話を聞くことにした。

「「あ～……」」
真っ先に聞いたのは、エリさんの同期で親しい友人でもある紅さんとタッチー。
「やっぱり、酷い？」
と、タッチーはおそるおそる聞いてきたし、
「清志さん、お腹大丈夫？」
と、紅さんもえらく心配してくれた。

「う～ん、今のところまだ大丈夫なんだけどね。でも、うちの掃除とか、洗濯とかは一通りできる人だから、なんで料理だけは出来ないのかなぁって、不思議に思ったもんだから」
音楽学校では料理もお手伝いと称してそれなりにする機会があるのに、なんで上達しなかったんだろう？
僕がそう疑問をぶつけると、彼女たちは申し訳なさそうに言い始めた。

「最初は皆、平等に色んなお手伝いを任されてたんですけど…」
「エリはね、料理の才能がぜーんぜん！！ないの！！どれだけ教えようとしても、駄目だったの！！」
「しかも、本人は『才能がない』なんて思ってないの…」
「でも、戦時中だったし、食べ物ももったいないでしょ？だから、お皿洗いとか、特に料理の才能なんて必要ないものお願いしちゃってたの…」

よくよく話を聞いてみると、どうやらエリさんが良かれと思ってする行動が、料理には全部悪影響を及ぼす結果になるらしい。
例えば、
「甘さが引き立つと思って」
と、煮物に塩を加え過ぎてみたり、
「こってり感が出た方が美味しいと思って」
と、豚汁にごま油を大量に投入してみたり。
あと、基本せっかちだから、生煮えなんかはよくあることだし、どうしても早く火を通そうと焦ってしまいがちで火力を強くしすぎるので、焦がしてしまうのもお約束だ。

根気強く教え続ければ覚えたのかもしれないけれど、戦時中の食糧難で「覚えてもらうより、食材を減らさない努力の方が優先」と判断されたんだろうな。

紅さん曰く、
「エリって気が強くて負けず嫌いだから、基本的には教えるのがすっごく大変だし！！」
というのもあったかもしれないけど。

ちなみに、紅さんだけじゃなくて僕もエリさんにものを教えるってのは自信がない。

彼女はとても魅力的で、僕にはもったいないくらいの女性だと常々思っているから、「教える」という行為自体を彼女に向けてしようなんて考えた事もないってのももちろんだけど、

考えてみると、僕が彼女に期待しているのは「家庭的な妻」という

面ではないのかもしれないんだよなぁ。

そんな事を、今度はその手の話にノってくれそうな人に話を聞いてみることにした。

「あぁ、リュータンも料理は得意やないで」
うどん茹でるんだけは天下一品やけどな、と、笑いながら影山先生は言った。
「やっぱり…」
と思わずつぶやいた僕を、「やっぱりってなんや、やっぱりって！！」と、どつきながらもまだ笑っているところを見ると、どうやらそれ程気にしてはいないみたいだ。
「じゃ、普段はどうしてるんですか？」
と聞いたら、なんと「できる方ができる時にやってる」との事。
「俺かて一人暮らしが長かったからな、料理はそれなりに出来るし、なんの問題もない」
という。

僕も一人暮らしの時期はあったから、それなりに料理はしたけど、結婚したら「お嫁さん」に料理を作ってもらうのが当たり前、という固定観念があって、そんなこと考えつきもしなかったなぁ。
なんとはなしにそう呟くと、影山先生は可笑しそうに「そうか？」と訊ねた。
「君は『男役』のエリに惹かれたと違うんか？」
「…え…？？」
「エリがタカラジェンヌやった時から、エリの事好きやったんやろ？まぁ外ではスカートはいてる姿も写生しとったみたいやけど、いくらダメや、ちゅうてもステージ衣装も描いてたしなぁ？」
「ははは…」

「『ははは』やない。ったく、ホントに犯罪行為なんやで？まぁ、今さらやけど。
俺はいつもファンには2通りいてる、と思っててな。君は『その人が好き』になるタイプやと思う、俺もそうやけど」
「その人が好き…」
そうや、と頷きながら影山先生は、自分が考えたファンのタイプについて説明してくれた。

先生が言う2通りというのは、
『その人が好き』というのと、『その役が好き』というものらしい。
『その人が好き』というタイプは、どちらかというと役や演目よりも『役者』に夢中になるタイプで、
『その役が好き』というタイプは、どちらかというと役者個人よりも『演目』や『役柄』に惹かれるタイプだというのだ。

「ま、『その人が好き』ちゅうタイプの方が始末におえんわな」
と、影山先生は言った。
「そうでしょうか？」
「そらそうやろ。俺らが男である限り、タカラジェンヌに対して『その人が好き』ちゅうことは『そいつに惚れた』と同じ意味やろ」
「まぁ…」
「タカラジェンヌ、しかも『男役』の状態で惚れたっちゅう事は、『普通の女』に惚れたわけやない、『男装の麗人』に惚れたんや、そうやろ？
だから俺は、リュータンが料理を作れなかろうが、俺より勇ましかろうが、世間様より少しずれてようがどうでもええ。そのままの、宝塚で主演男役はってた頃の『リュータン』に惚れたんやからな。…君もそんな風に思わんか？」
「そう、ですね」

何か、腑に落ちた感じがした。
僕は確かに、タカラジェンヌとして舞台に凛々しく立っていたエリさんを好きになったんだ。
だからべつに、彼女に世間一般で言う所の「良妻賢母」を期待してたわけじゃないんだって、今さら気づいた。

もちろん、『可愛いお嫁さんになる』って言ってくれる彼女の事はものすごく愛おしい。僕のために彼女が沢山努力したり可愛くなっていく様はみていてとても楽しいし、嬉しい。
でも、それは彼女が彼女自身を見失わない範囲での話だ。
僕が初めて惹かれたのは、タカラジェンヌだった頃の彼女で、
彼女は気高く美しく、それは時に高慢に映るほどだったけど、それすらも魅力的だったし、時折見え隠れする内にあるおしゃまな少女の様な可愛らしさや、意外と繊細な一面も含めてすべてが『好き』だった。
それは今でも変わらない。
むしろ、そんな彼女が僕を選んでくれたことは僕の一番の自慢でもあるんだ。

そう、彼女の全てが好きだ。

考えてみればまだ片思いだったあの頃、エリさんが料理する姿なんて考えもしなかったし、エリさんと一緒に生活することを想像したことはあったけど、なんとなくエリさんが「家事をする」というよりは、僕がエリさんに何かをして喜んでもらう、という想像の方が多かったかもしれない…
そんな事を言うと、影山先生は
「惚れた弱みやな」

と、ニヤニヤ笑った。

う～ん、弱みかどうかは分からないけど、なんとなく自分たちがどうありたいか、は分かった感じだ。

「とりあえず僕、自分ができる時は料理手伝ってみます」

「それでええんちゃうかな。ま、尻に轢かれてる男は辛いわなぁ？」

「…そうですね、辛いですよね。影山先生達の結婚式は、リューターンさんの希望が全部かなって『世にも珍しいすき焼き屋』で『新郎新婦とも燕尾服』だったって聞きました。ホント、尻に轢かれてる男はつらいですよね」

「……！！」

ニヤニヤし続けていた影山先生にちょっとした反撃を加えつつ、「じゃあ僕、大道具の打ち合わせがあるんで…」とそそくさとその場から立ち去った。

と、まあそんな感じで『目指すべき自分たちの生活スタイル』に向けて、僕も少しずつ努力している…わけなんだけど。

「ねぇエリさん、今日僕時間があるから少し料理手伝おうか」

「…何？あなた私の料理が下手って言いたいのっ！？そんなに私の料理が食べたくないのーっ！？」

…僕の気持ちを理解してもらうために小一時間かかった。

ホント、『穏やかな日々』って言い難い毎日だ。

でも、僕はこれで、これが、僕の『幸せな日常』なんだ。

穏やかな日々（後書き）

清志さんで一度は書いてみたかったんですけど、まぁまとまりませんね。
途中でエリにシフトしようかと思ったんですけど、止めました。
文才が欲しい。

いつか猫になる日まで（前書き）

投稿遅すぎて申し訳ありません。

いつか猫になる日まで

穏やかな日々…

と、言えるかどうかは分からない。

一歩、外に出ればファンの方々から
「タッチーさまー！！」
「サイン！！サイン下さ～い！！」
「お手紙読んでぇ～」
と声をかけられたり。

雑誌社の取材を受けたり、富裕層の方のパーティに招待されたり。

私は割と、有難くも騒々しい世間の荒波にさらされてるんじゃないかなぁって、最近では思っている。

「そんなの当たり前じゃない！！タッチーったら、今まで気づかなかったの？」
部屋でおやつを食べながら、ぼんやりとそんな事を言うと「びっくりした～」と、紅は目を見開いてそう言った。

「タッチーは今をときめく宝塚雪組の主演男役なのよ？『トップスター』なんだから、世間に注目されるのは当然だと思うの。
今はだんだん女性が働いているのも認められるようになって、タカラジェンヌは勤労女性のあこがれの的でもあるし。
それにねぇ、タッチーは育ちはどうあれ生まれは『橘家のオジョウサマ』なんですもの、

なんかー、フンイキというかー、そういうのがぁ、私たちとはー、違うと思うのー」

だからー、みんなー、憧れちゃうのー。

と、からかうように語尾を伸ばして話す紅に、思わず眉をひそめてしまう。

「橘の家は確かに由緒はあったけど、その頃の事なんか殆ど覚えていないわ。

記憶にあるのはただ、地位と名誉と贅沢な暮しにしか興味がない両親と、お金にしか従わなかった周囲の人たちの事だけ。

……宝塚に入ったころの私の立ち居振る舞いは、そりゃあ酷いものだったでしょう？

私の雰囲気が『お嬢様のよう』なのは、宝塚で教えてもらったからよ」

「……まぁ、舞台で歌ってるリュータンさんに汚い草履を投げるような傍若無人な振る舞いは、いくら貧乏人の私だってできなかったけど」

タッチーちょっと世間様に反抗期だったよね、とニヤニヤ笑いながら言う紅に「そうだったかしら…」と返すと「そうでしたー」と返された。

「ホント、私最初はタッチーに近づくの怖かったもん。身なりは私より貧乏っぽいけど、なんかこう…やっぱりかもし出す「何か」が違うし、いつも切羽詰まった感じで、なんか急いでるようなんだけど何に急いでるのか分かんないし…」

ああ、あの頃は。

ただ、早く自分の『居場所』が欲しくて、でもどこが自分を受け入れてくれるのか分からなくて。

お腹がすくのが嫌、痛いのが嫌、馬鹿にされるのが嫌、でも、周りにはそれしかなかったから。
宝塚に入ってから、急に環境が良いように変化してもなかなか心が追い付いていかなかった。

「……お腹、空くのだけは嫌だったの……」

なんの繋がりもないような言葉を返してしまったけれど、紅はにこっと笑った。

「そうね、きちんとご飯が出るって分かったら、タッチーだんだん落ち着いてきたもん」
でもしばらく食い意地はってたよねぇ、私のおやつも食べちゃうしさ。
ブチブチ小言を言いながら、それでもどこか楽しそうな紅をみて、私もまた少し笑った。

「あ、でも」
おやつを食べている手を止めて、紅は「思い出した！」と話しだす。
「なぁに？」
「私とタッチーの雰囲気が違うって話、これはほんとよ？前にファンの人から「紅ちゃんは子犬のようだけど、タッチーさんは猫みたい」って言われたもの」
「猫？私が？」
「うん。私も割とそう思う」
感覚だから、どこがどうとは言えないんだけどね？と言われてしまったのでそこから先は聞けなかったけど。

私が、猫。

……よく、わからない。

「そら、お前は猫っぽいなぁ」
そんな話を影山先生にすると、先生は開口一番そう言った。
「猫っぽく見えますか」
「まんま猫やろ。なんや、自分ではよう分からんのか？」
先生は先生で、かなり不思議そうにしているので、私も私なりに分からないところを口に出してみた。
「猫って、自由気ままで、自分の好きなことしかやりたくない、みたいなイメージがあるんです。なんとなく、リュータンさんみたいな」
「うん？ああ、リュータンはなぁ…猫…かなぁ」
そう言って少し首をかしげている先生に、私は続けて話しかける。
「私は、リュータンさんのように自由気ままに…自分の主張を押し通すなんてできない気がするんです」
私は、猫のように自由気ままに生活するなんて事、できたことなんて一度もないもの。

そういうと、
「アホ」
と、簡潔な一言がかえってきた。

「アホ…？」
「アホやろ。おまえな、このご時世に「自由気ままに生活できる」奴なんてそうそう居てへんぞ。

リュータンだってな、この間ゴミの始末を間違えて近所のばぁさまに怒られてたんやぞ」
「えっ！？リュータンさん怒られてたんですか！？」
「ああ俺もえらいビックリした、思わず物陰に隠れて一部始終を見守ってしもうたわ」
びっくりしすぎて開いた口がふさがらない。
そんな私を見て「リュータンには言うなよ」と言いながら先生は可笑しそうに笑った。

「まぁ、俺らが言うとる「猫っぽい」ちゅうのは、お前の解釈と少し違うなぁ」
「……そうなんですか？」
「それもそうやけど…ってとこかな。お前も大概苦労しとるけど、このご時世大抵の人間が苦労して、その上自由気ままに生きてへんぞ。
「生きるには、生きていくには、どんな動物もみんな何かを我慢せなあかん。…でもな、猫っちゅうヤツは「それでもイヤや」と主張できる奴と違うかなぁ、と思うんや。
野良猫なんか見てみぃ、あいつら絶対家猫になった方が楽やのに、飯だけ食って『ほな、さいなら』ってひととこに居着きはせんやろ。
……て、そこやないんや、俺が言いたい『猫っぽい』ちゅうんは！」
なんだか話が脱線したらしく、先生は頭を掻いて首を振りながら唸っている。
先生がこの動作をする時って、何か伝えたいことがまとまってなくって考えをまとめてたりする時なんだよね。
舞台稽古の時と同じように、先生の考えがまとまるまで、待つことしばし。

先生は、ようやく唸るのをやめて『猫っぽい』についての話を始めた。

「猫っぽい…お前らの同期で言うと、猫っぽいんはタッチーとトモかな。エリ…もどっちかといえば…や、あいつは犬に近いかもなぁ。紅はなぁ。確かに、人の言う事にいちいち反応して喜怒哀楽がはっきりしててホントに犬っぽいなぁ。…あれはあれで色々考えてるんやろうけど。
お前やトモなんかは猫っぽいとか言われるやつやと思うんやけど、共通点は『他人の入り込めない世界がある』トコやな」

……それってなんだか私がとんでもなく自己中心的だと言われている気がする。
そんな事を思って私はちょっと憮然としたけど、そんな私を「まあ落ち着け」なんておざなりに宥めながら、先生は話を続ける。

「うーん、猫っぽいって言われている奴らってな、そう言っている人間にとっていい意味でも悪い意味でも『自分の方向を見ていない感じのする人間』なのかも知れんと思うんや。
なんというかこう…こっちを見ている時も確かにあるんやけど、それよりも他の事に集中している時もあるような…上手く言われんな、ああ、紅は一緒におる時はずっと『今自分との話の事』を考えているけど、トモやと『なんか他ん事考えてる』と思う時があるっちゅうような…」

「……！それ、分かりやすいです！！」

「おお、わかるか！！せやからな、悪い意味ではないんやで。トモかて、お前と一緒におる時他ん事考えておっても、間違いなくお前の同期で、友達やったやろ？
ただ、トモにはトモの世界があって、そこは邪魔しない方がいいと思ったりする時があらへんか？」

「そう、そんな感じの時があります！！」

「お前にもあるで、そんな感じ」

そうなのか。

ちょっと思ってもみなかったことを断言されて固まってしまった私を見て、先生は苦笑した。

「せやから、悪い意味ではないって言ってるやろ。
……たしかに、少し寂しいなぁって思う瞬間はあるかもしれん。けど、お前らとトモが間違いなく友人であったように、お前の事も周囲のやつらは間違いなく『友人』と思ってるはずやで。
……まぁ、それに」

そこで先生は人の悪そうな笑みを浮かべてこう言った。

「主演男役としては『自分の方向を見てくれない感じのする人間』位の方がスターっぽくてええんちゃいますか？タッチーさん」

気張れよ、トップ。

……と、なんだか励まされたんだが煽られたんだか、茶化されたんだが、意味があるんだかないんだか分からない会話をしてしまった。

「へー、そんな事があったの…てか、多分先生もまとまんなかったんじゃないの？猫っぽさってやつ」

「あ、やっぱりそう思う？」

公演を見に来て、楽屋まで遊びに来てくれたエリに、先生との会話を話すとエリはニヤニヤしながら言った。

「まぁ確かにタッチーは猫っぽいし、紅は犬っぽいかもしれないけど、人間『猫っぽいか犬っぽいか』の2通りだけで仕分けきれるわけじゃないし、要は感覚の問題よ。そんなに気にしなくてもいいわよ」

「そうかしら」

「そうよ！！」

タッチーって妙な事ばかり気にするのよね！と、妙に息巻いているエリを見るとあんまり気にすることでもなかったのかしら、とも思う。

「でもね、猫っぽいなんて言われたの初めてだったから、なんとなく気になっちゃったの」
と、呟いてみると「そりゃそうよ！」とエリはさも当然だというように続けた。

「だって今まで、誰かを動物に例えるような生ぬるい状況じゃなかったじゃない。猫だの犬だの言ってられなくて、ただただ人間様がどう生き残るかで精一杯だったじゃない。
……平和になった、って事なんじゃないの？」

「……ああ、そうね、そうなんだ…。やっと、猫だの犬だの言ってられるようになったのね」

そういえば戦争中は、他の動物の事なんて考えた事もなかった。
穏やかな日々、が、やっと来たのかもしれない。

「そうよ！！タッチーなんかそのうち、『あ～、猫みたいに縁側でぬくぬくと日向ぼっこしながら余生を楽しみたい～』なんて言い出すんじゃない？」

笑いながら話すエリに、私も笑いながら
「そうね、そういうの憧れちゃうかもしれない」
と返した。

私が猫っぽいのかどうか…実はまだよくわからないけど。

でも、確実に周囲には『穏やかな日々』が訪れている。
いつか、私にも、穏やかな日々がやってくるに違いない。
そう、エリの言った、猫みたいに。

それまでは、私が自分で手に入れた、この華やかな場所で頑張っていこう。

そうね、いつか猫になる日まで。

ホントに穏やかに日々を、手に入れるその時まで。

いつか猫になる日まで（後書き）

苦しみました。先生しゃべってくれ…てか、タッチーが無口すぎて…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5170o/

恋よりも、生命よりも

2011年5月1日17時18分発行